

【高校生の部】 作文部門 最優秀賞

「今、ここにある危機にすべての人と声をあげたい」

清泉女学院高等学校 2年 ^{ひろせ} 廣瀬 みのり

さっきまで青くさんさんと晴れていた空から、急に大粒の雨が大量に降ってきてせっかく干した洗濯物が濡れ、スクールだ！と叫びながら取り込んだ自分もびしょ濡れになる。

スクールは、亜熱帯気候区で発生するのではなかっただろうか。なぜスクールのような雨が降るのだろう。

夏のはずなのに、気温が20度を下回り、長袖で過ごす。

8月中盤なのに、まさか長袖で寝ても寒くて起きるとは。

この夏は、異常気象を耳にすることや体感として感じる事がかつてないほど多い。

国内では熱海で土石流が発生するなど、各地に被害がでていた。海外では毎週のように山火事、洪水、ハリケーンや熱波などがおこっていた。

この異常さを人々は程度は違えど感じているはずだ。得体のしれない不安を胸に抱えている人も多いだろう。

なぜこんなことになったのか。

原因は温室効果ガスの排出によって起きている気候変動だ。

産業革命以降、豊かな発展を遂げるために、人類は温室効果ガスの排出を続けてきた。そして今日に至るまで、温室効果ガスの排出を増加させ地球を温め続けた結果、地球の歯車は狂い始め、危機的状況になってしまった。

気候変動は、ある臨界点を迎えると歯止めが効かなくなり人間の手では止められなくなってしまうことが分かっている。

気候変動を止められなくなるまでのタイムリミットをカウントダウンしている Climate Clock と呼ばれる時計は、現在6年と114日を示している。

もし私達が何も行動を起こさず、変化を作り出すことができなければ、約6年後手遅れになるということだ。

約一年前、このことを知った私は絶望した。余命宣告をされたような気分になった。

誰だって将来に不安を抱えていて、それは昔の人も同じだったと思う。しかし仕事につけなくて衣食住に困ったらどうしようと漠然と考えるのと、自分がどんなに頑張っても温室効果ガスを減らすことができなければ、気候変動によって生活すらままならなくなる可能性が高いと科学によって示されるのでは全く違う。

まだ止められる可能性があるなら、こんな未来は絶対に阻止したい。そう考えた私は、Fridays For

Future という気候変動に対するアクションを行っている若者のムーブメントで1年ほど前から活動している。

そして、私はそこで「気候正義」という言葉があることを知った。

「気候正義」とは気候変動の影響や、負担、利益を公平・公正に共有し、弱者の権利を保護するという人権的な視点のことだ。

これまで温暖化を進めてきたのは、主に先進国で裕福な暮らしをしてきた人たちであるにも関わらず、実際にいま被害にあっているのは、ほとんど温室効果ガスを排出してこなかった途上国の人々や、社会的に立場の弱い人達だ。

また、若者やこれから生まれてくる将来世代は、これまで生きてきた人たちが出してきた温室効果ガスによって未来を奪われることになる。この他にも人種の格差や性的格差などの格差構造によって、理不尽で不公平な影響が起きてしまっている。

気候正義は、複雑で多岐にわたることだが、地球に優しい社会を作るためのシステムチェンジを行っていく上でいちばん重要な観点だと思っている。

私はこの活動を始めてから、日本各地で活動している沢山の仲間と出会うことができ、視野も広がった。しかし私たち若者が本来学生としてすべきことは、学び、遊び、食事をとり、寝る。たったこれだけのはずだ。

それにもかかわらず、どうして時間と労力を使ってこの問題に取り組まなければいけないのだろうと思うことがある。自分たちや将来世代の「未来」が手遅れになる前に、また既存の構造によって苦しむ人を増やさないために、行動を起こさないといけないといけないと危機感を持って声をあげているにもかかわらず、聞く耳を持たず勉強してから出直せといってくる人もいる。

だが、気候変動は、程度が違えどすべての国のすべての人に影響がある問題だ。それは人種・性別・世代・思想・宗教などを問わない。そして、すべての人に関わるからこそ多面的な視点やアプローチが必要だ。つまり、これは対立すべき問題ではなく、みんなで声を上げられて、みんなで解決することができる問題だと私は考えている。そして、そこに希望があると思う。

今、行動すれば間に合う。最悪のシナリオは避けられる。ならば、やるしかない。

「気候正義」を追求しながら、対立せずみんなで声を上げて気候危機を解決できたとき、そこには格差も分断もない愛に溢れた素晴らしい世界が待っているに違いない。